

# 縄手 遺跡

1



# はしがき

縄手遺跡調査会

会長 中田昌義

東大阪市南四条町に所在する縄手小学校・縄手中学校の敷地は、縄手遺跡として知られています。この遺跡の発見は、昭和26年の縄手中学校新設のときにはかのぼります。それは、昭和38年に48才で世を去った畏友吉水順教君が最初に注意し、その存在が確かめられました。これが一つの契機となって、有志が相集まり、枚岡の郷土研究をはじめることになり、さらに枚岡市史の編さんとなって、今日につながる文化財保護事業の出発点となったことをふりかえってみると、関係者の一人として感慨無量です。

こうした感懐とは別に、地域の発展による人口増によって、両校の生徒数は年ごとにふえる一途をたどり、教室の不足、校舎の増改築の必要が切実な問題となっています。一方両校の敷地は周知の遺跡であることから、校舎の建築に先立って発掘調査を行なう必要があり、校舎建築と遺跡の保存・調査を共に進めなければならないという現実に直面しています。このため昭和44年度より今年度まで3カ年にわたって校舎建築に伴う発掘調査が実施されてきました。

昭和44年度の調査においては、諸般の事情から文化財の立場が弱かったことへの反省と、調査のスムーズな進行をはかるため、昭和45年度における縄手中学校校舎新設に伴う調査から“縄手遺跡調査会”が組織され、私が会長に就任することになりました。調査会としては文化財保護の立場が校舎建築に優先するという見地に立って、完全な調査を実施することを前提とし、遺跡全体の保存をはかることを立前に仕事を進めています。

昭和44年度における調査の遺物整理、概報作成等の作業は、調査会において行なうことになっていましたが、このたび資料の整理が一応終了いたしましたので、本概報を上梓する運びとなりました。発掘調査から今日に至るまで、実際に数多くの諸君の手が加わっていますが、とくに資料整理を鋭意進めてもらつた原田 修・並河由紀子さんのご労苦に対して敬意を表する次第です。

## I 遺跡の位置と環境

縄手遺跡は、東大阪市南四条町に所在する縄手小学校・中学校の敷地を中心とした地域に広がっているが、その範囲は南北約300m、東西約300mを測り総面積10万m<sup>2</sup>にも達する縄文～古墳時代の複合大遺跡である。

遺跡は、地理的に見ると、奈良県と大阪府を南北に画す生駒山地の西斜面に発達した複合扇状地の一つ、鳴川谷によって形成された谷口扇状地の末端部に位置している。

ゆるやかな斜面となっている山ろくには谷口に沿って旧村落が連なり、扇状地末端部を南北に東高野街道（現在の国道170号線）が通じている。この街道は、ほぼ山ろくに沿い、付近は大体標高15～20mを測る。この街道より西は、やや急な斜面をもつて平野部へ移行している。さらに、扇状地末端部は、各谷川とその支流によって区切られるため、谷川によって囲まれる末端部は、東に高く西に低い一種の台地状の地形を呈している。遺跡は、こうした地形上に立地し、現地表で標高約15～20mを測る。

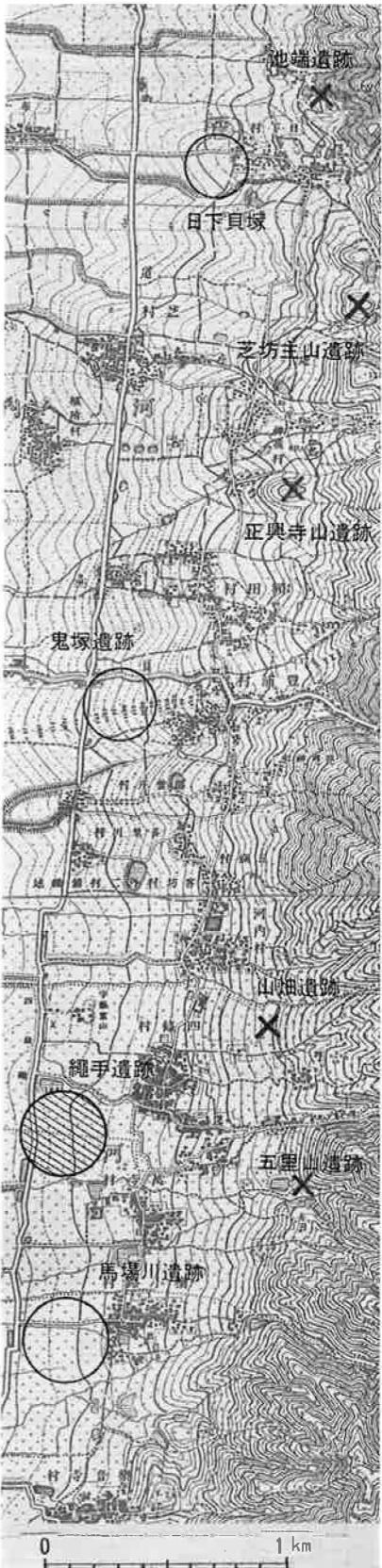
現在では、住宅が密集し、旧地形の微妙な変化は見られなくなっている。

縄手遺跡を初めとして、各時代の遺跡は山ろくでも扇状地形上に密集しているが、当地の比較的単純な平野部（古くは、大阪湾からの入江が入りこみ、旧大和川によって次第に陸地化していった）と山地という地形から、各時代の集落ないし生活の中心は、その間の扇状地形の末端部の湧水点付近に占地され、結果的に遺跡を時代的に複合させることになった。東高野街道より西方にのびる平野部（水田地帯）には、比較的遺跡の分布が少なく、山ろくの南北に細長く連なる限られた扇状地形上に遺跡を密集させている。

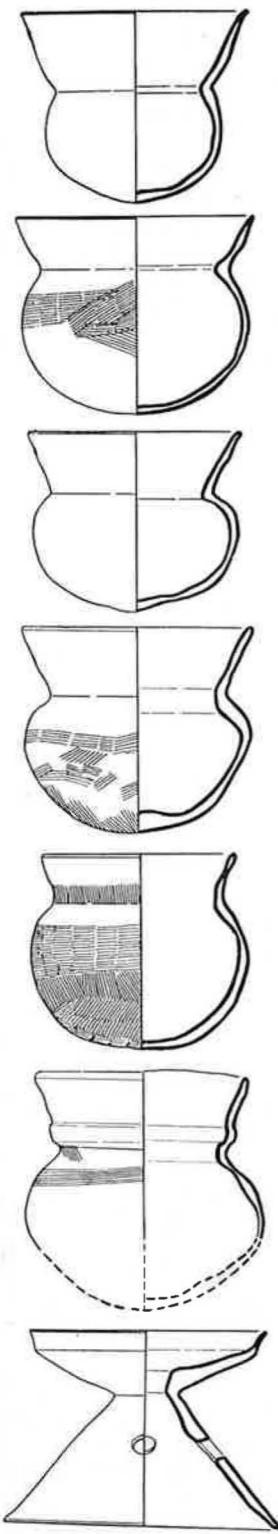
時代別に周辺の分布を概観してみると、北より扇状地末端部では、縄文（後期～晩期）・弥生（前期～後期）の集落が占地され、谷口付近では、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の古墳群を分布させている。また、古墳群周辺の扇状地上部あるいは、丘陵附近には、北より池端遺跡、千手山遺跡（ナイフブレイド）、正興寺山遺跡（ナイフブレイド）、山畠遺跡（ナイフブレイド、ポイント）、五里山遺跡（有舌ポイント）など時期の古い遺跡がならんでいる。

とくに、縄文時代の遺跡を見ると、縄手遺跡の北方約4kmに日下貝塚（後期～晩期）、これより約2.2km南において鬼塚遺跡（晩期）がある。さらに縄手遺跡の南方1kmには、最近調査を行ない、一括した縄文時代資料の得られた馬場川遺跡（中期～晩期）があり、縄手遺跡と同様に扇状地末端部を占地し、標高・地形ともに近い。この様に、山ろくに沿って縄文時代の集落が連なることは、旧入江との関係あるいはそうした自然環境の中における生活様式を考える上に、出土遺物と共に重要な意味を持ってくる様に思われる。

（原田）



第1図 遺跡の位置



第2図 繩手小学校出土土師器  
(昭和40年出土)

## II 調査の経過

東大阪市南四条町に所在する市立繩手小学校・同繩手中学校敷地の一帯からは、これまで何回かにわたって多数の遺物が出土し、繩手遺跡として知られている。

この遺跡がはじめて発見されたのは昭和26年のことであった。同年1月に旧中河内郡繩手町立繩手中学校が開校されることになり、2月に繩手小学校南側の水田一帯を敷地とする整地工事が行なわれた。この工事に伴って土師器・須恵器を主とする多数の遺物が出土し、当時繩手町の教育委員であり、考古学に深い関心を持っておられた池島町淨慶寺住職故吉水順教氏がその発見に注目され、この遺跡の存在が知られることになった<sup>1)</sup>。氏は大阪府教育委員会社会教育課技師であった藤沢一夫先生(現在、帝塚山大学講師)にその旨を報告された。当时、藤井は大阪学芸大学(現在の大蔵教育大学)に在学中で、堅田直氏(現在、帝塚山大学教授)らとともに大阪府教育委員会によって行なわれていた山畠古墳群の調査に参加していた。藤沢先生・堅田氏とともに現地をおとずれたのは2月6日のことであったが、こうしたことから私にとっては忘れることのできない遺跡である。

次いで昭和31年、繩手中学校のグランドがつくられたときにも、その整地工事の際、敷地の東側で土師器・須恵器を主とする多数の土器が出土した(第4図の4)<sup>2)</sup>。その後、繩手中学校では、鉄筋校舎の建築に伴って後期の弥生式土器や、2号館の工事の時には弥生時代後期の壺棺2基が出土し(4-3)<sup>3)</sup>、また繩手小学校の鉄筋校舎建築工事では中期の弥生式土器や多数の土師器が出土した(第4図-2)<sup>4)</sup>。

こうしたことによって、この遺跡が弥生時代から古墳時代さらに歴史時代の遺跡であることがわかっていたが、続いて昭和40年には、小学校の北側の繩手農業協同組合事務所新築工事で縄文時代後期の土器が出土し(4-1)，この遺跡が縄文時代にさかのぼる複合遺跡であることが明らかになって来た<sup>5)</sup>。しかしこれまでの発見は、いずれも土木工事または建築工事に伴うものであったため、遺構の存在や遺物包含層の状態についてはまったく不明であった。

ところで繩手小学校は、昭和45年度における生徒数の急増によって教室が不足するため、東大阪市教育委員会では、同校敷地の東北にあった木造校舎1棟を撤去し、新たに3階建の鉄筋校舎(普通教室6、特別教室3)を建設することになった。周知の遺跡に事前調査を行なうことなく工事を行なうことはそれ自身問題はあったが、当時の本市における文化財行政の姿勢としては、校舎の建築よりも文化財の保存・調査を先行させるという段階ではなかった。こうした中で、工事は昭和44年10月に開始され、パイルの打ち込みと掘削が開始された。

1) 弥生式土器・土師器・須恵器など多数の遺物が出土し、昭和26年2月5日付の毎日新聞に、「珍しい聚落遺跡一村の考古学者が発見」として報道された。吉水氏の採集された遺物は昭和38年10月、氏の死去に際して旧枚岡市教育委員会に寄贈され、現在、本市で所蔵している。

2) 藤井直正「枚岡の古代遺跡」(『研究紀要』第3集、大阪市立西中学校、昭和31年12月)

3) 4) この遺跡については、『枚岡市史』第3巻史料編(1)に略述した。

5) 松田正昭「枚岡市繩手遺跡出土の土師器」(昭和41年4月、プリント)

た。これまでの遺物の出土状況から考えて、この工事においても遺物の出土することは確実であり、担当者としては気が気ではなく、工事の進行に従って排出される土に気を配っていた。

果たして10月末になって、工事現場の地下約1mのところから遺物、それも縄文式土器の破片が出土しはじめ、その報は市教委としての正規のルートよりも先に、現地を見た一個人によって大阪府教育委員会に入った。11月1日、大阪府教育委員会文化財保護課から工事を中止するよう指示があり、11月2日には同課技師水野正好氏が視察に来られた。本市では直ちに工事を中止するとともに、水野氏を囲んで今後の措置を協議し、関係機関・工事請負業者との折衝を行ない、とりあえず発掘調査を行なって記録保存をはかることになった。この段階においても、なお教育委員会の内部では校舎建築を先行する考え方が優先し、調査期間を12月5日までに限るという状況であった。調査は11月18日より敷地の北端より開始したが、地表面下約1mに上下2層の遺物包含層があり、溝状遺構・配石遺構や土塙墓を検出したほか、多数の縄文式土器片・石器・土偶等が出土した。

こうした中で、まだ建築面積の約半分を終えたところで12月5日を迎えた。同日午後に開かれた会議で、調査は一応打切り、建築工事を再開するという結論になったが、調査に参加した原田修・奥井哲秀・北野保三君の連名と、大阪商業大学考古学研究会から市教委に対して、遺跡の重要性から発掘調査を続行することと、これまで市教委がとて来た埋蔵文化財行政に対する反省を求める要望書が提出された。現場では上記諸君による工事再開の阻止と市民への啓蒙活動が展開されたが、それはあくまでも考古学を学ぶ者として純粋に事態を見つめ、これまで市教委のとて来た姿勢に対する警告を発した行動であったのである。正直に言って、これまで何年もの間彼等が高校生であった時から私と共に仕事を進めて来てくれたその彼等が、こうした行動をとったことによって私の受けた打撃は大きかった。そして途方にくれたのである。私の生涯においてもっとも苦痛であり悩み抜いた数日間であった。しかし彼等の行動によって、文化財行政にたずさわって来た私自身の考え方と態度に反省を迫られ、東大阪市教育委員会としての今後の方向づけが決められたのである。

こうした中で、市教委としても府教委の指示や考古学専門家の意見を聞き、学生諸君の要望にもこたえて遺跡の重要さと発掘調査の完全実施を行なう必要を認識し、校舎建築の竣工が予定の昭和45年3月よりも遅れることに対して学校当局およびPTAの方がたに了解を求めた上、調査を再開することに踏み切った。12月19日、関係学生諸君と話し合いをもち、今後の埋蔵文化財行政のあり方を協議したところ了解を得ることができ、12月21日より発掘調査を再開した。昭和45年は12月29日まで、年明けて1月5日より26日まで延31日間にわたり一応の調査を完了した。

今回の繩手小学校の校舎建築に伴う繩手遺跡の調査は、旧枚岡市から東大阪市まで過去十数年に亘る文化財調査の中でもっとも多難であり、そして問題を投げかけた調査であった。しかしこれを契機として、それまで確たる方針もな



第3図 調査風景

くすべての面にわたって後手に回っていた文化財行政が前向きに前進するためには大きな転換点となつたことは否定できないであろう。事態の顛末をこと細かに記したのもこれを一つの出発点としたい願いからに外ならない。

本調査は東大阪市教育委員会を主体とし、同社会教育部参事松尾恵善、同嘱託藤井直正が担当した。調査員として東大阪市文化財専門委員荻田昭次氏を委嘱し、原田 修・久貝 健・奥井哲秀・北野 保・本城節子の諸君のほか、神戸山手女子短期大学・大阪商業大学考古学研究会・近畿大学考古学研究会ほか多数の大学・高校学生諸君の参加・協力を得た。なお、発掘作業の進行のため東大阪市連合青年団に応援を求めたところ積極的な支援を受けることができ、乗本団長ほか東支部牧野支部長以下団員諸氏が寒い時期にもかかわらず夜間おそらくまで作業に参加されたことを付記し感謝の意を表したい。

先にも記したように今回の調査は、市教委として、学校教育行政と文化財行政の谷間にはまり込んだ受難の調査であったが、校舎建築の遅延にもかかわらず、文化財保存の趣旨を理解いただき、調査の全期間を通じて協力をたまわった縄手小学校有山忠久校長以下職員諸氏、同校 P T A の方がた、および株式会社森組の関係者、ならびに困難な状況の中で調査の進行に協力され、作業を進めてくれた諸氏・諸君のご労苦に対し、担当者として感謝の意を表する次第である。

### III 遺跡の状態

縄手遺跡は、前に記した様に、縄手小学校・中学校を中心とした約10万m<sup>2</sup>の区域がその範囲と考えられるが、今回の調査地点は、縄手小学校敷地の東端に南北に長く校舎の改築の行なわれる敷地で、先年、縄文式土器・師楽式土器が出土し、猪木<sup>えのき</sup>遺跡と呼ばれていた縄手農協の東南約60mの地点である。調査は、校舎改築の予定される延べ500m<sup>2</sup>の敷地内で、南北に長く、東半がすでに機械による掘削が行なわれていたため、西半の南北40m、東西7.5mの敷地（B～D地点一仮称）と校舎の東に接して設けられる浄化槽部（5×3m A地点）についても一応の調査を行なった。

調査は、まず建築予定部の西半を1辺3mの方眼で地区設定を行ない、東よりB—C—Dの地区と、南北に北より1～14の区画を設定し、各区は、N T B—1の様に示した。

1 層 位

調査地点は、現地表で標高約 17.5 m を計り、NTB-1～14に至る約 40 m の間の層の状態は極めて複雑で、南半部は、地表下約 1 m に続く（暗）黄灰色の細かい粘質砂層が地山となり、上部に黒色の有機質分を含んだ粘土層をのせ縄文時代の遺物包含層を形成している。包含層は比較的薄く、10～20 cm 程度である。上部には、こぶし大～人頭大の礫を多く含む 20～30 cm の厚さの砂礫層が重なっている。

北半部は、粘質の包含層が地形的に上り、砂を混えた粘質土となっている。さらに北半部は、色・質ともに近い層を幾層か地山上にのせており、時期の異なる包含層を形成している。上部は、礫層ではなく、黒褐色の砂質土をのせており、地山も南半部と異なり暗黄褐～黒褐色の砂質粘土となっている（巻末折込参照）。

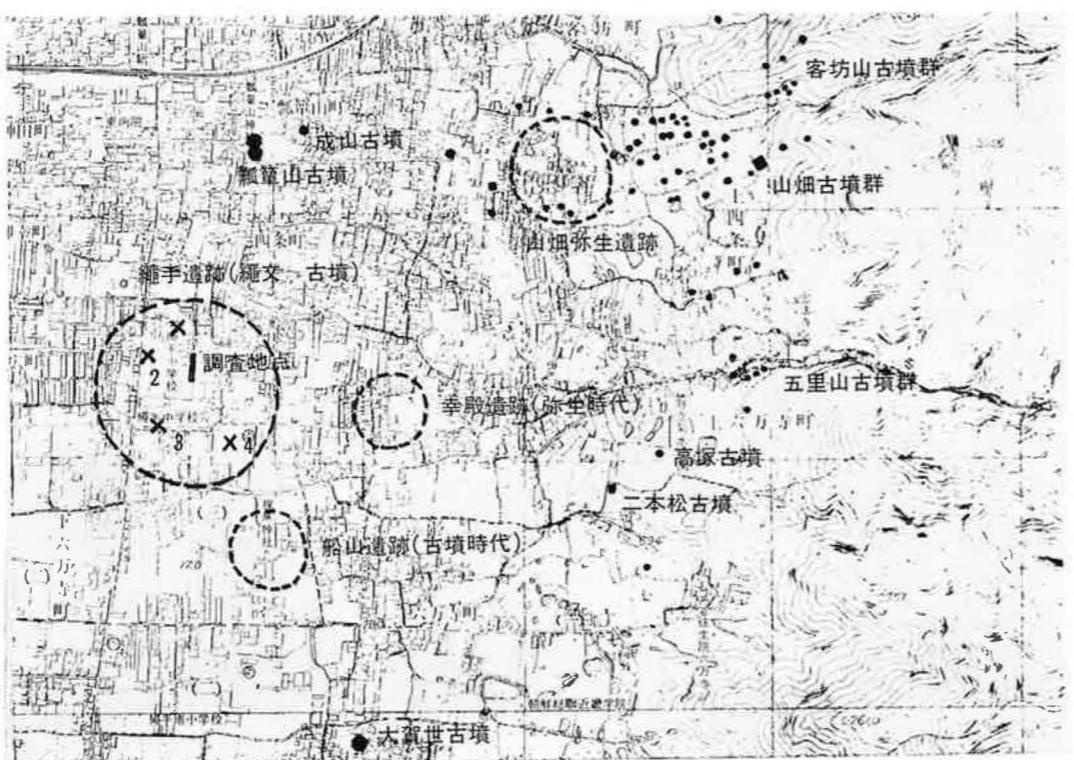
2 遺 構

B～Dの各地区にわたって、溝状遺構・土塙墓・石組遺構・ピット群・住居跡・焼粘土面・土器片敷遺構等を検出した。A地点では、多くの縄文後期土器片が北より南へ下る地山（礫層）に沿って出土した。A地点を初めとして他の地点の縄文式土器の出土量は、極めて多量にのぼり、とくにB～D地点の南半部において検出し、住居跡と目される周辺より多くの出土を見た。土器は、一部中期のものが含まれているが、そのほとんどが後期前半期に属するものであり、検出した遺構もこの時期に当たるものと思われる。

## B—D区の状態

### 1) 石組遺構

当地に多い閃緑岩の転石を円形状に配置したものと、やや四角に組んだ石組をN T B-5で2基検出した。東に位置する石組は、20~30cm大の自然石を斜円形に配したもので、一部を開けている。内部には、焼土ないし炭等の遺存はみとめられなかったが、石組炉跡と考えられるものである。長径90cm、短径80cmを測る。他の1基は、石組炉跡の西約1m離れた位置にあり、30cm大の上部の平坦なやや大型の自然石を中心として両端に小型の石材を5~6個ずつ平行に配している。石組の性格は不明であるが、先の一基が炉跡とすれば、



第4図 繩手遺跡と周辺の遺跡



第5図 土塙墓



第6図 石組遺構



第7図 土器出土状態

炉跡、ないしは火に関係する祭祀遺構あるいは調理的な用途を持つものであろうか。

#### 2) 土塙墓

石組遺構の西、約3mの位置に2基検出した。(NTD-4~5) 平面形は、橢円形を呈している。北の1基は、長径1.45m、短径0.72mを測り、内部において人骨(大腿骨)を残していた。土塙は、約20cmの深さに掘られ、内部に長さ80cmの平坦面をつくっており、20~30cm大の3個の石を据えている。他の1基は、前記土塙墓の南に接するもので、南北に長く橢円形の平面を持ち、やや大型のものである。土塙の西端は、排水溝のため切断されているが、長径約2m、短径約1.2mを測る。

土塙南端の肩部に小さな石を数個配置し、内部には20cm大の自然石1を据えている。人骨を検出しなかったが、先の土塙同様、土塙墓と考えられる。

#### 3) 焼土面および焼粘土面

各地点で5ヵ所検出した。これらは地山が円形状に焼けた焼土面と、土器に用いる様な粘土を円形あるいはそれに近い状態に敷き、上部で火を焚いたと思われるもので、粘土は、縄文式土器片に似た比較的堅い焼粘土となっている。前者は、NTB-2で1ヵ所、C-4で2ヵ所を検出し、後者は、NTC-1で1ヵ所と土塙墓の南約1mの位置に1ヵ所検出した。周辺では、他の出土土器と異り、後期初頭にあたる中津式並行の土器片がまとめて出土している。

また、NTB-2の焼土面を中心に多くの後期土器片が散在し、土偶の出土を見ている。

#### 4) 住居跡

B-D区の南半は、前記の通り、極めて多くの土器が集中しており、NTB-C-7~8にかけてL字形に続く落ち込み部を検出した。

この落ち込み部は、地山である黄青色砂層を掘り込んだもので、焼土と共に多くの土器・石器が内部に遺存していた。平面形は、不整形で掘り込みが北側で切れるが、一種の竪穴式住居であると考えられ、柱穴は検出しえなかつたが、掘り込みの南辺より約60cmの位置に、径50cmの円形ピットがある。

この住居跡と考えられる落ち込みの南は、小さなピットが幾つか雑然とならび、それにそって細長く落ち込みが続いている、前記落ち込みと同様、住居跡の残痕と考えられる。

#### 5) 土器片敷遺構

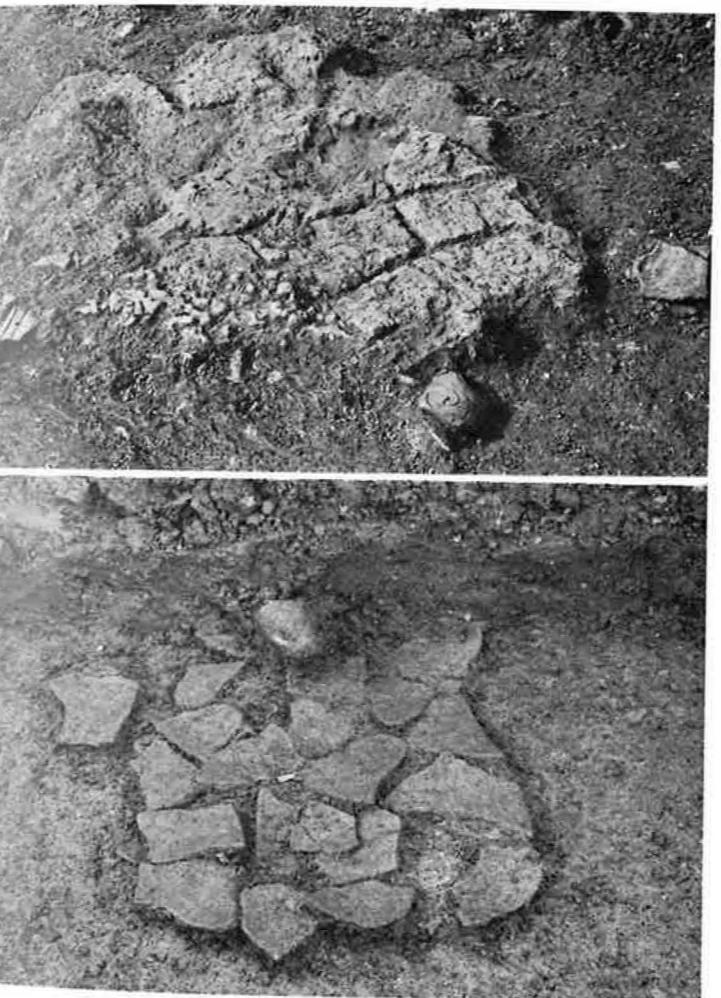
石組遺構と住居跡と考えられる落ち込み部のほぼ中間の位置(NTB-7)，

で検出したもので5~10cm大の縄文式土器の深鉢片をすべて裏向きの状態にして、長さ約60cm、幅50cmの長方形に敷き並べたものである。土器敷きの下面是、ほぼ同じひろがりに焼けていた。この遺構の性格は不明であるが、粘土を使用していない焼土面との関連が考えられる。

#### 6) 溝状遺構

NT C, D-1において検出した溝は、幅90cm、深さ30cm、断面U字形の浅いもので、先の焼粘土面の南を東北から南西に走っている。内部に含まれる土器は極めて少なかった。さらに南の石組遺構との間に自然の落ち込み部(西へ下っていく)を検出し、これが南北両区を区切っている感がある。内部には後期中ごろに近い土器片の出土を見ている。

(原田)



第8図 焼土面および土器片敷遺構

#### IV 出土遺物

各地点で出土した遺物として多量の縄文式土器片がある。その大半は、後期前半にあたる土器群であり、他に若干の中前期土器片が含まれている。石器としては、石斧・石錐・タタキ石・石鏃があるが、比較的の出土量は少ない。このほか、土製品としてミニチュアの土器および土偶・環状垂飾がある。

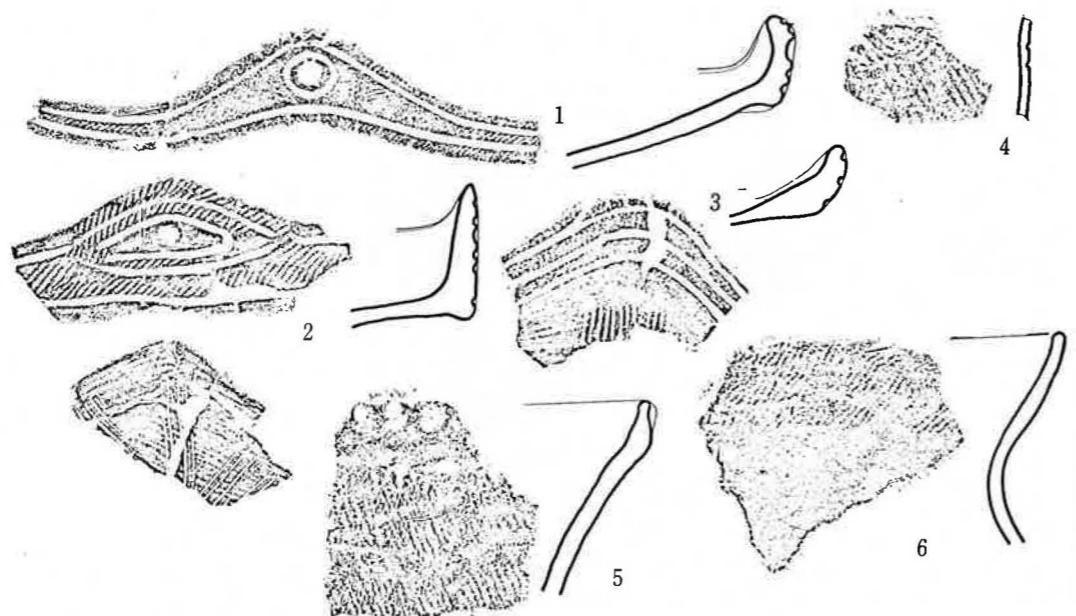
とくに土器については、調査の緊急性のためと層位の不明瞭な点が多く、層位的分類の上に大きな困難と問題が残されたが、一応典型的な文様・形態を基礎に分類を試みた。文様を持たない粗製の土器については、今後改めて詳細な報告をしたい。なお、他の遺物として部分的に出土した中期弥生式土器があるが、本文では割愛したい。なお、遺物は図版番号一土器番号で示した。

##### A 縄文式土器

###### 1. 中期の土器

調査によって出土し、また採集によって得られた土器資料の内、若干の中前期的要素を持つ土器片が若干ある。破片の大部分は、やや磨滅しており、調査では、明瞭な中期の遺構を検出しておらず、下層に中期の遺構が存在するか、あるいは本地点より別の地域にあるかについては現在のところ不明である。土器片は、全体として、乳白色～灰白色の白っぽい色調のものが多く、中には、後期土器片に近い色のものが含まれているが、胎土が粗く、石英砂粒を多く含んでいる。

9-6は、色調が茶褐色を呈し、深鉢の口縁部破片で、砂粒を多く含んでいる。口縁部はゆるやかに外反し、再びゆるやかに立ち上がるもので、口縁上部約4cmの部分に斜縄文を施している。



第9図 中期の土器

9-5も口縁部片で、口縁部にそって、指頭圧痕文を横にならべ、下部に斜縄文を施している。

9-4は、胴部破片で、2条の沈線を弧状に施し、下部に粗い縄文を施している。

###### 2. 後期の土器

今回の調査によって出土した土器類の大半が後期でも前半期に属する要素を持っている。土器は、全体の傾向として、茶褐色系の強い土器片が多いが、文様を持つ土器の中には乳白色～灰褐色系の白っぽい土器片があり、黒色に近いものも含まれ、これらについてはとくに検討を要する。

土器は、文様(磨消縄文・沈線文など)を持つ土器と、いわゆる条痕仕上げの表面の粗い土器に分けることが出来るが、さらにその中間的な縄文・櫛目・沈線によって文様が施され、条痕の仕上げを行なっているのが少い土器もある。

器種としては、深鉢・浅鉢(丸底・平底)の他、注口土器・皿・壺があるが、量的には少ない。

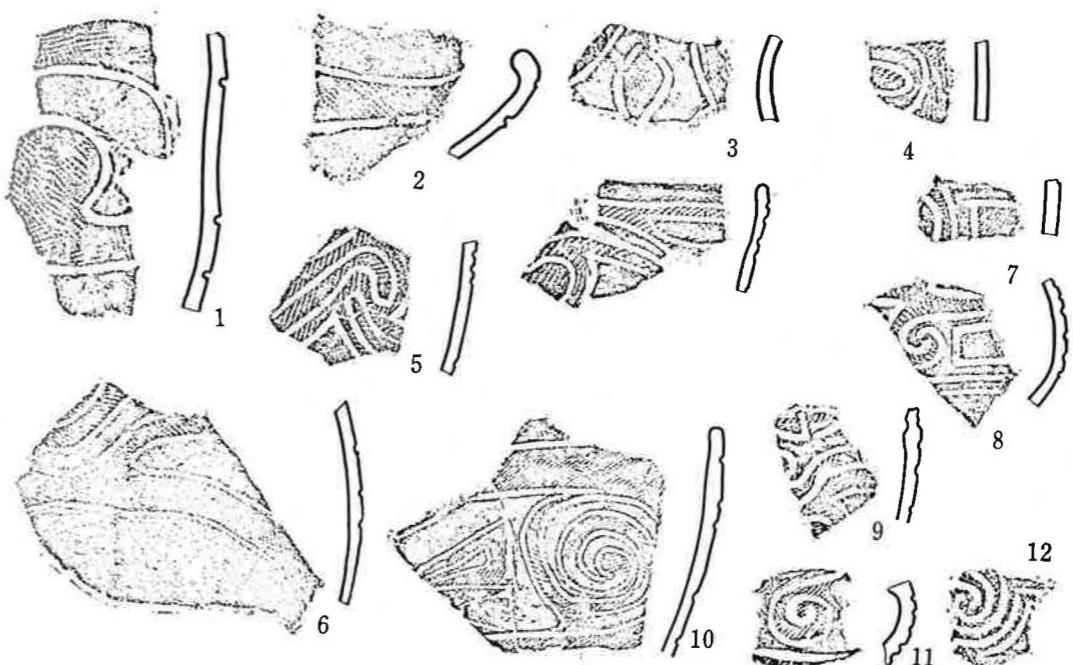
まず磨消縄文を主体とした文様による分類を行なうことにしたい。

##### 精製土器

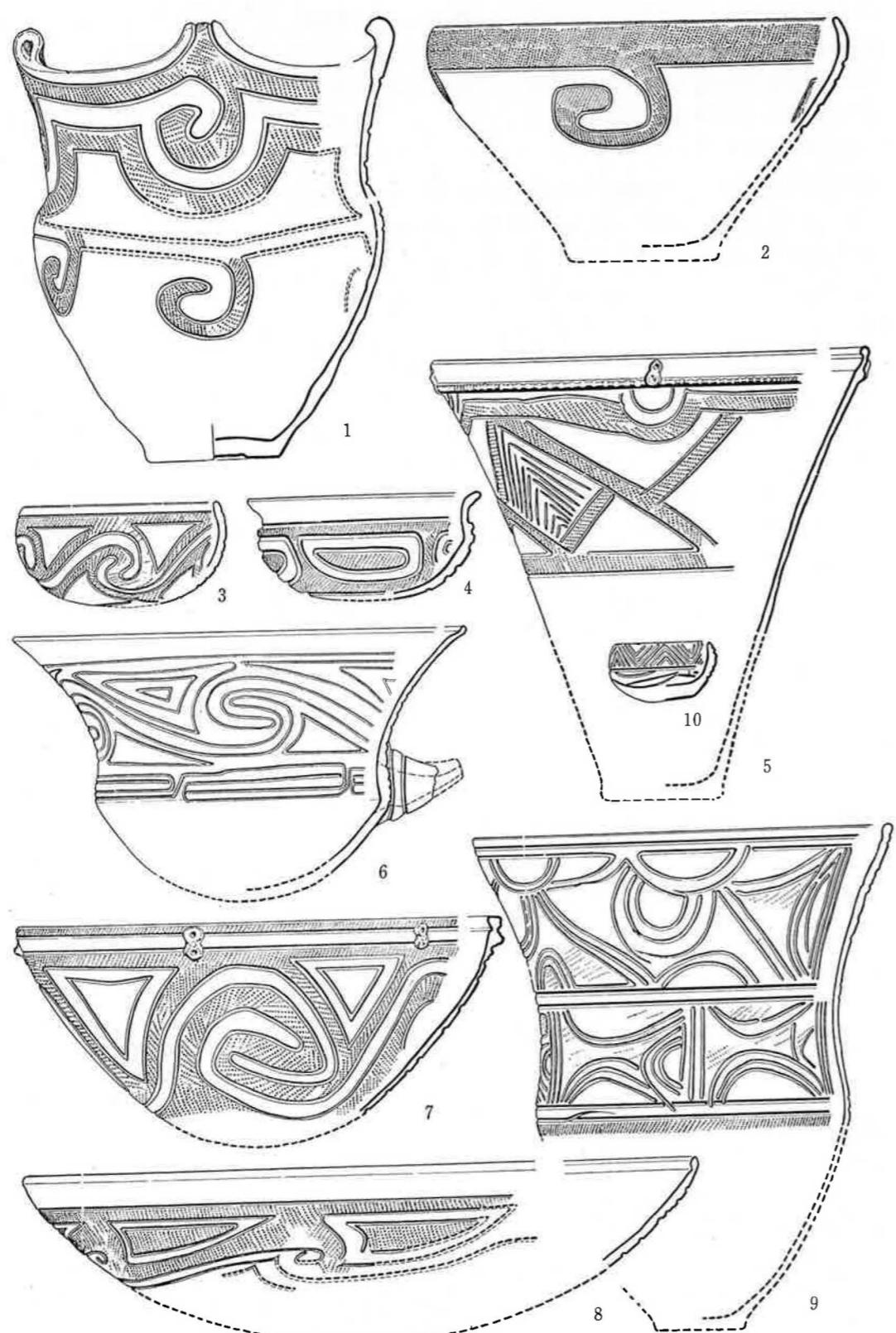
###### 第1類

後期初頭中津式に並行する土器である。これらは、NT C-D-6で検出した焼粘土面周辺で出土したものが多い。

11-1は、口径24.6cm、高さ28.2cmを測る深鉢で、口縁部は厚く丸みも持った山形口縁に作っている。突起下部および胴部には、2本の沈線間に縄文を残した縄文帯が渦巻文を構成し、さらに上部の渦巻文をカバーして一帯が加



第10図 第1・2・3類



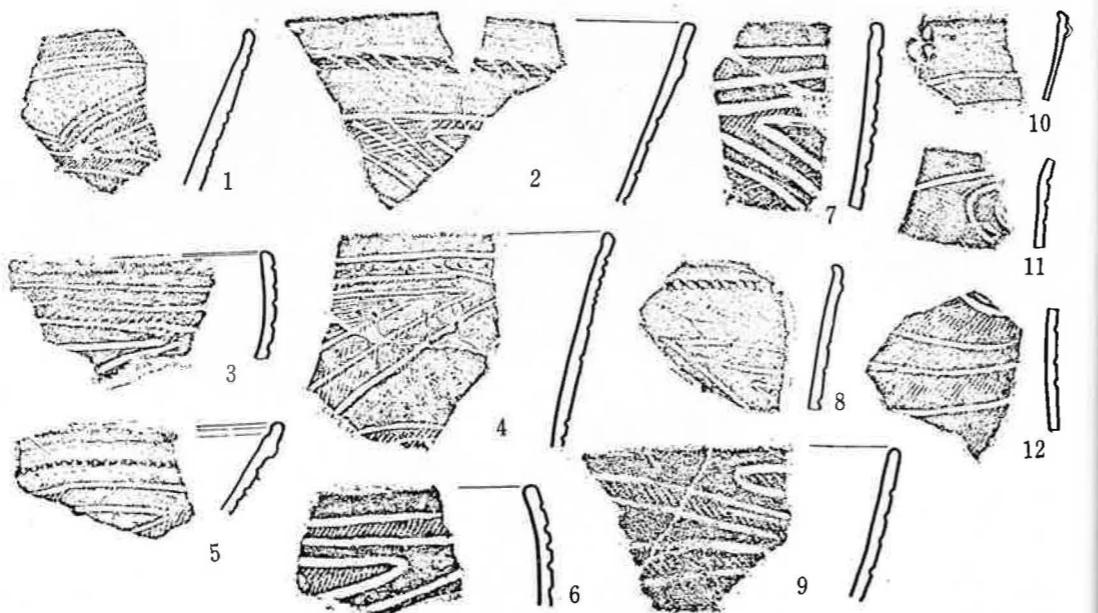
第11図 第1・2・3類

— 10 —



第12図 各種縄文式土器

— 11 —



第13図 第4類系の土器

えられ、胴部も別の一帯が渦巻文を作っている。

11—2は、普通の鉢型土器で、口径26.6cm、高さ15.2cmを測る。口は比較的開き、口縁近くでやや内傾している。

10—3は、口縁山形部の破片で、山形部より出る2本の沈線間に縄文を残すが、前記土器片より沈線の手法は粗く、縄文も統一性がない。

10—1は、大型の鉢の破片で、渦巻部の縄文施文方向は一定せず、施文原体も約3cmの単位となっている。

#### 第2類

この種の土器は、比較的多く、深鉢や浅鉢の上半部に、横位に流れる連続S字状文帶の施文によって残る上下の空間を横長の三角文で埋めた文様構成となっている。磨消縄文の手法が多いが、中には、沈線のみのものもある。また、口縁下部に沈線を施し、所々に8字形の貼付文を施している。全体として器壁はうすく仕上げられ、口縁内上部に凹線的手法を加え、口縁を内へひねった感じのものが多い。

11—3は、口径12.4cm、高さ6.3cmを測り、口縁がやや内傾する丸底の小形浅鉢である。

11—7は、この種の典型的な例で、口径31.2cm、高さ14cmを測るボール形の浅鉢である。口縁下に突帯を一条つけ、8字の貼付文を施している。

11—8は、上記土器より口径が広い皿である。口径約43cm、高さ12cmを測り、かなり崩れた文様構成となっており、の字文は、直線化している。

他の器種として、注土器(11—6)があるが、全く磨消手法を使わず、比較的細い沈線による施文を行ない、注口部を横に直線化したの字状文を連続さ

せてつないでいる。口径は29cm、高さ約17.5cmを測り、口縁部は大きく開いている。10—5・6は、大型浅鉢の胴部破片と思われ、S字文と三角文の一部を残している。縄文は、比較的細い原体を用いている。

#### 第3類

渦巻文を主体とするものが数例あり、中津系の渦巻と若干異っている。横位に各模様が固定化し、幾何学的に構成されている。

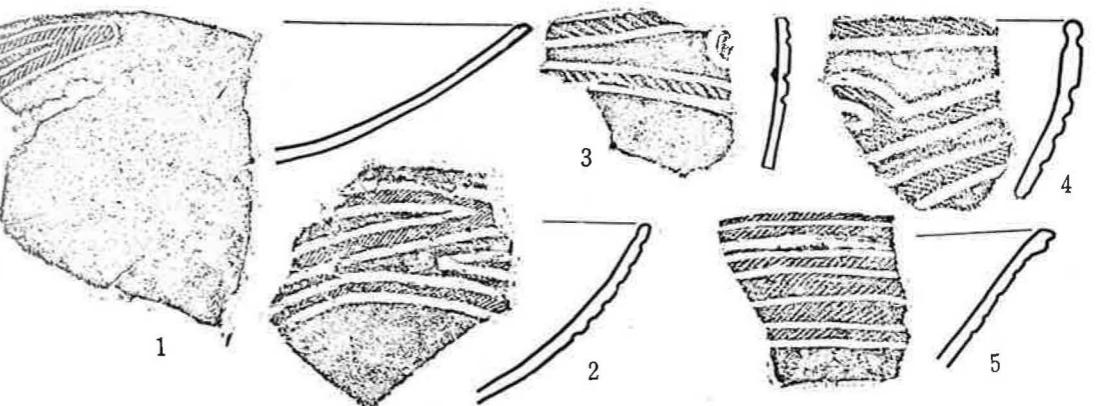
10—10は、浅鉢の口縁部で、横位に施された縄文帶間に深く渦を巻く文様と三角文をいれている。胎土は比較的密で焼成も良い。

他は小片で、渦巻文様を残しているが、比較的簡略化されたもので、7は長方形文様と組合せられている。12は、相異なる沈線の渦巻を組み合せたもので、磨消手法は極めて粗い。

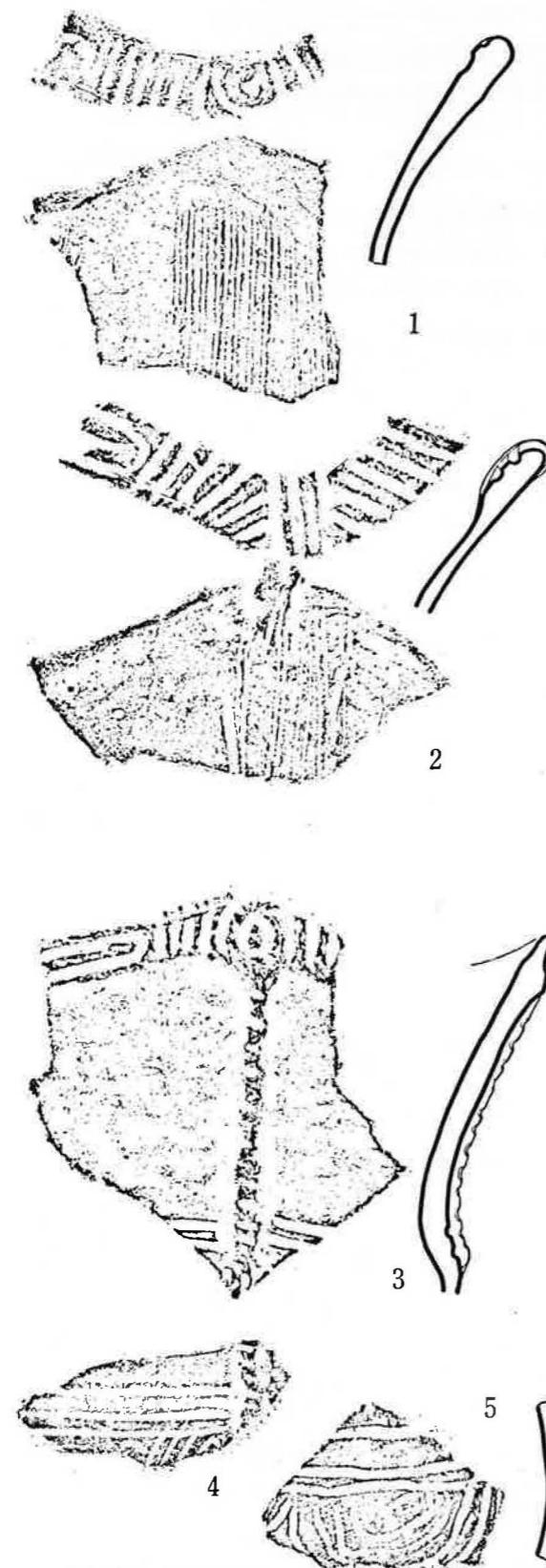
#### 第4類

この種の土器も多く、量的には第2類よりも多い。これらは主として、住跡と考えられる落ち込み部周辺から出土したものが多い。文様構成として、第2類に見られた突帯が口縁下部に施されている鉢が多く、また突帯には刻目が施され8字文を貼付けているものが多い。器種としては、底部より若干外へ反りぎみに大きく開く深鉢が主体となり、文様・構成も第2類や第3類とは異なり、器体上半部に菱形文を横に連ね、上下の空間を三角文で埋めたものとなってきた。また、この文様は、細い沈線が加えられ、文様がさらに、飾された例もある。

11—5は、その典型的なもので、口径28.2cm、器高28.5cmを測り、口径器高がほぼ等しい。口縁下部に施された突帯には刻目を付け、8字文を貼り付けており、下部は縄文帶が半円形にかこんでいる。菱形文の内部は、さらに上部の両辺となるんで、8本ずつの沈線が加えられている。12—8も同様な文様構成となっているが、突帯はなく、比較的文様の配置の落ち着いたもので、浅い鉢と考えられる。口径は、28cmを測る。13—1～10は同類と思われるが、6・7・9は、次の第5類との中間的な文様を持っていることと考えられる。



第14図 第5・6類とその亜種



第15図 A類・B類

### 第5類

この種の土器片は少量であるが、他の類別した文様より直線化、簡略化されているもので、連続する横長の三角文様が主体となっている。拓本としてのせた資料は、全て浅鉢の口縁部破片で、14—2は、大小2つの三角文を合わせた文様で、1は、口縁部に接して、細長く三角文のみを縄文帶で作っている。

3、4は一応前記類別よりはずれるもので、細かい磨消縄文帯を口縁部縄文帯に対して斜めに配しているが、斜縄文帯より曲線的に枝分れした縄文帯があり、5類とも多少異なるが資料的には少い。

### 第6類

この種の土器片は、これまでの1～5類とは異なり、いわゆる磨消手法あるいは曲線的な部分のないもので、口縁近くに幾本かの沈線を平行に引き、この部分に縄文を施しているものである。14—5は鉢の口縁部で、やや角張った口縁断面を持ち、下部に5本の沈線を引き、縄文を施している。

磨消縄文を主体とし、比較的器面の整えられた土器群に対し、器面がやや粗く、口縁波頭部を中心に各種文様を施し、口縁下部より胴部にかけ、細くまとまりのない櫛状の施文原体で自由にかきおろし、一種の平行線文を描いているもの、あるいは胴部に太い沈線による文様を施しているもの等がある。概して、全く文様を持たない条痕仕上げの土器群よりもていねいに製作されている。

### 半精製土器

#### A類

比較的大きく開いた口縁部の内側に3cm位の肥厚した平坦面をつくり、太い竹管状の沈線によって独特の文様を施し、外面波頭下部には、縦位に櫛状の施文具で、平行線を粗っぽく自由にかき下している。復原器形は、12—4に近いものであろう。15—1は波状口縁の波頭外側から内面にかけて細長い貼付文を施しており、太い沈線間にはわずかに縄文が見られる。なお、口縁内の波頭部をつないで、2本の沈線を□状につないだ文様で埋めている(15—1、2)。

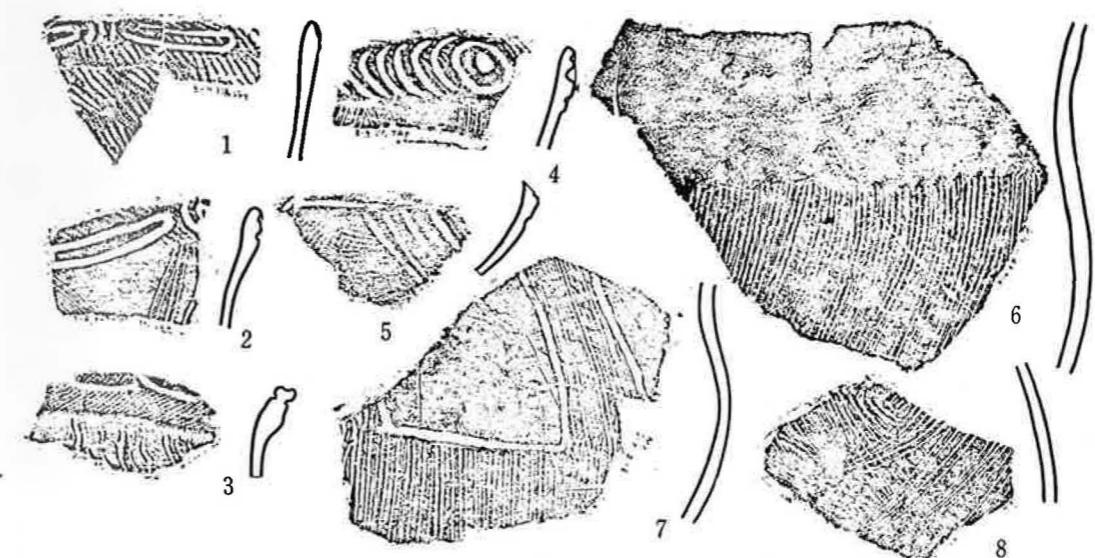
#### B類

A類とは異なり、口縁内部の模様が肥厚し、縁帶化

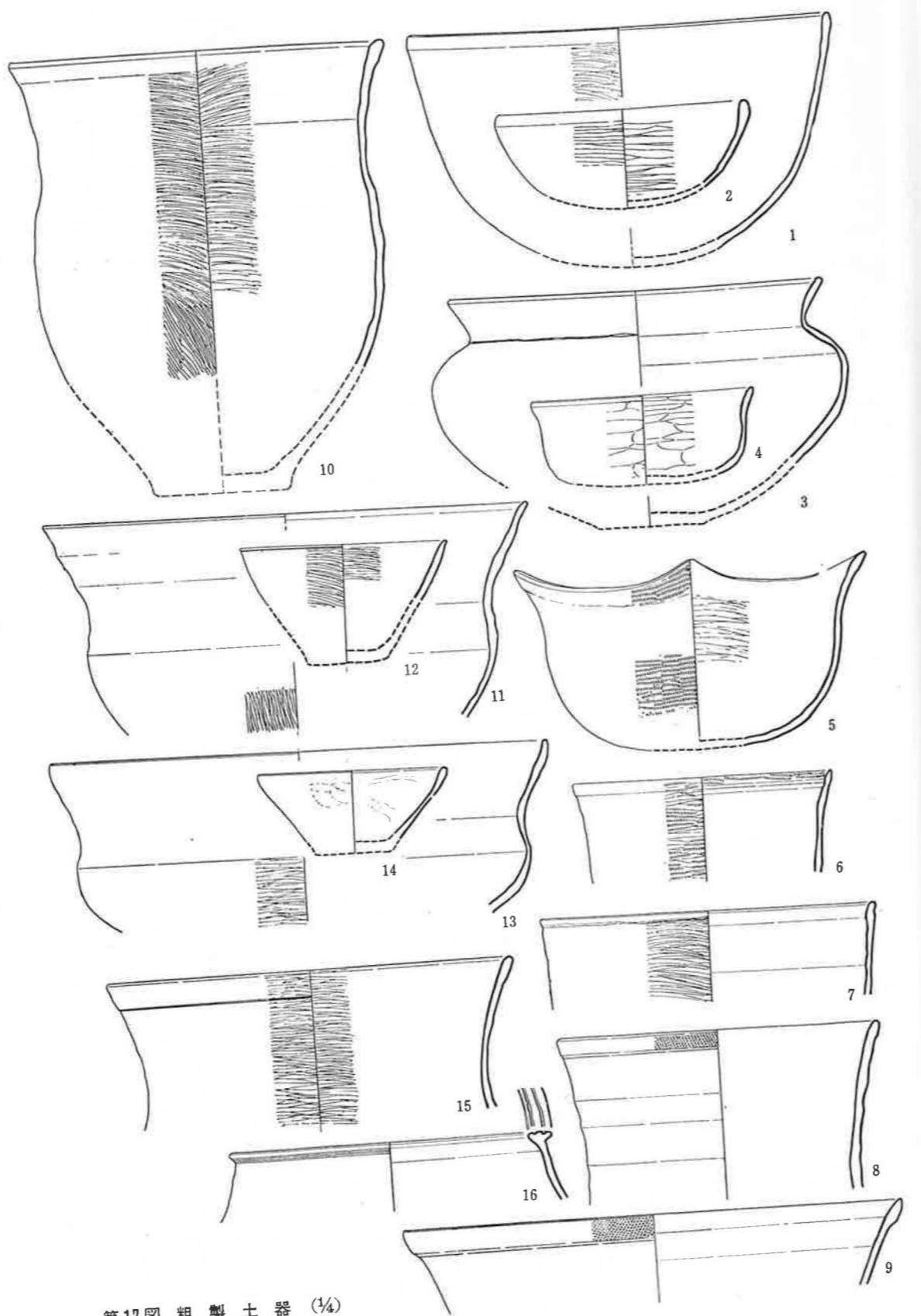
した口縁外部(幅約2cm位)に移り、円形文を中心にして横に弧状あるいは直線に近い沈線を加え、波頭部間にA類同様□状の沈線で埋めている。16—1～4も、B類に属するものであるが、この種の土器に施されている円形文ないしは、それに類似する土器片は、口縁部の肥厚するに従い、文様自体も大きくなり、胴部の弧状の文様も櫛状あるいは幾本か縦に並列する沈線文様に変わっているものと思われる。15—3は、胴部から大きく口の開いた深鉢の口縁部の破片で、4と共に波頭部から胴上部へ刻目凸帯を付けており、胴上部で横位の沈線を数本設け、さらに下部に弧状の沈線を重ねている。口縁部の文様帶は、粗っぽく縄文を施している。16—1～3も若干文様の上で異なっているが、やや肥厚した口縁部に前記土器片と比較的類似した文様を施しているが、1は、ほぼ屈曲のない深鉢の口縁部で、全体に縄文を施している。4は、文様帶幅が広くなり、厚みも増していく、より発展的な文様となっている。12—9も比較的上記土器に類似しているが、渦巻文となっており、胴部では3本の沈線を加えて複雑にしている。

#### C類

この種の土器は、12—1、4に図示した様に肥厚した口縁部に縄文を施し、細い櫛状の施文具で縦位に土器の周囲に文様を規則的に施している。12—1は、底部より直線的に開く鉢で、やや斜方位の平行線文を幾単位か施している。4は、比較的胴の張った深鉢で、上下2段に交互に文様を配している。16—6～8は、胴部破片で、櫛状の施文具で縦位・斜位に施したもので、この内、7の様に太い沈線と櫛状文を合せ、1種の磨消手法に類似したものもみられる。この他、胴部は櫛状施文具を自由に使い、12—3の様に3本を単位とした縦位の曲線文、あるいは連鎖状文等変化にとんでいるが、若干時期的にはさかのぼる可能性がある。



第16図 C類土器



第17図 粗製土器 (14)

- 16 -

粗製土器 (第17図)

#### D類

1点のみであるが、T字形の口縁部の平坦面に2本の沈線で構成される文様間に縄文を残し、波頭部にかわるものとして、細長い粘土を貼り付け、上部に竹管状の刺突文を施して周囲を沈線でつつんでいる。

文様を持つ土器に対し、わずかに口縁部あるいは胴上部に縄文を施したもの、まったく貝殻条痕仕上げにとまっている深鉢が多い。他に浅鉢・壺に近いもの等があるが、磨いた仕上げのものが多い。

この種の土器は、量的に非常に多く、すべてを整理する段階に至っておらず、代表的な器形のみの図示にとどめたい。

#### 鉢

17-10は、底部を欠いているが、複原高35cm、口径30cmの比較的口縁の開かない深鉢で、口縁端を残し、横～斜位の条痕を施している。15も同類である。16は、他に例のないもので、内傾するT字形の口縁上部に2本の沈線を施している。口径約26cmを測る。6～8は、直立に近い深鉢の口縁で、6は条痕と疑似縄文を外面に施し、口縁内部には、凹線的手法を加えている。8は、肥厚した口縁に縄文を施している。

#### 浅鉢

丸底のものと平底のものがある。10-1は、平縁の丸底で、口径34cmの半円形に近い形をしている。外面は、条痕仕上げである。5は、波状口縁の丸底の鉢である。口縁はやや厚く、胴下半部とともに疑似縄文を施している。口径28cm、高さ15cmを測る。2・4は、小型の鉢で、共に平底である。2は、口縁端が厚く、4はやや外弯する。12・14は、平底の鉢と思われ、底部より直線的に開いている。12は、口径16.8cm、高さ9.4cmを測る。

B石器類 (第18図)

#### 1. 石斧

3点出土している。8は、刃部を欠損しているが、一種の乳棒状石斧で、それ自体の断面は、比較的不整形である。9は、やはり頭部のみで、長さ8.0cm、幅6cmを測り、比較的大型の石斧である。研磨は少し粗っぽい。10は、美しく研磨された完形石斧で、扁平両刃の定角式に近いものである。刃部は、かなり磨滅しており、長さ7.2cm、幅4.3cmを測り、重さ91gを計る。

#### 2. 石鎌

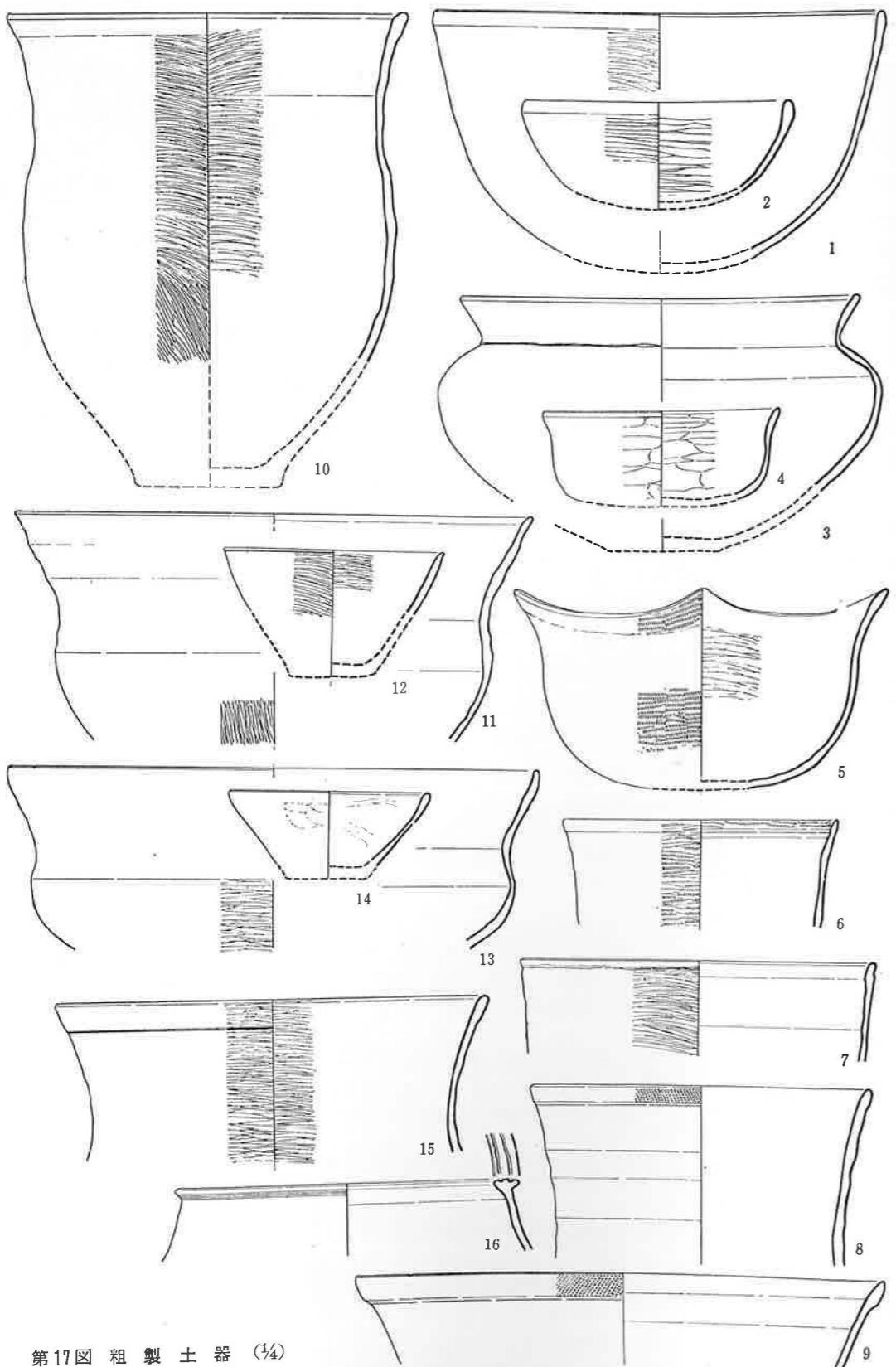
代表的なものを図示した。9は、弥生時代のものと思われる比較的長い木の葉形をしており、断面は薄い。1～5は縄文時代後期のもので、形としては、雁又の部分の比較的入り込みの少ない定形となっている。石材はサヌカイトを使用している。

#### 3. 石剣

長さ約9cm、径2.5～2cmの円形の断面を持つ粘板岩系の石材を用い、研磨はよくない。両端を欠いているが、石棒であることも考えられる(7)。

#### 4. 石錘

2点出土しており、共に同形のものであるが、11は、粘板岩系の堅い石材を



第17図 粗製土器 (1/4)

- 16 -

粗製土器 (第17図)

#### D類

1点のみであるが、T字形の口縁部の平坦面に2本の沈線で構成される文様間に縄文を残し、波頭部にかわるものとして、細長い粘土を貼り付け、上部に竹管状の刺突文を施して周囲を沈線でつつんでいる。

文様を持つ土器に対し、わずかに口縁部あるいは胴上部に縄文を施したもの、まったく貝殻条痕仕上げにとまっている深鉢が多い。他に浅鉢・壺に近いもの等があるが、磨いた仕上げのものが多い。

この種の土器は、量的に非常に多く、すべてを整理する段階に至っておらず、代表的な器形のみの図示にとどめたい。

#### 鉢

17—10は、底部を欠いているが、複原高35cm、口径30cmの比較的口縁の開かない深鉢で、口縁端を残し、横～斜位の条痕を施している。15も同類である。16は、他に例のないもので、内傾するT字形の口縁上部に2本の沈線を施している。口径約26cmを測る。6～8は、直立に近い深鉢の口縁で、6は条痕と疑似縄文を外面に施し、口縁内部には、凹線的手法を加えている。8は、肥厚した口縁に縄文を施している。

#### 浅鉢

丸底のものと平底のものがある。10—1は、平縁の丸底で、口径34cmの半円形に近い形をしている。外面は、条痕仕上げである。5は、波状口縁の丸底の鉢である。口縁はやや厚く、胴下半部とともに疑似縄文を施している。口径28cm、高さ15cmを測る。2・4は、小型の鉢で、共に平底である。2は、口縁端が厚く、4はやや外弯する。12・14は、平底の鉢と思われ、底部より直線的に開いている。12は、口径16.8cm、高さ9.4cmを測る。

B石器類 (第18図)

#### 1. 石斧

3点出土している。8は、刃部を欠損しているが、一種の乳棒状石斧で、それ自体の断面は、比較的不整形である。9は、やはり頭部のみで、長さ8.0cm、幅6cmを測り、比較的大型の石斧である。研磨は少し粗っぽい。10は、美しく研磨された完形石斧で、扁平両刃の定角式に近いものである。刃部は、かなり磨滅しており、長さ7.2cm、幅4.3cmを測り、重さ91gを計る。

#### 2. 石鎌

代表的なものを図示した。9は、弥生時代のものと思われ比較的長い木の葉形をしており、断面は薄い。1～5は縄文時代後期のもので、形としては、雁又の部分の比較的入り込みの少い定形となっている。石材はサヌカイトを使用している。

#### 3. 石劍

長さ約9cm、径2.5～2cmの円形の断面を持つ粘板岩系の石材を用い、研磨はよくない。両端を欠いているが、石棒であることも考えられる(7)。

#### 4. 石錐

2点出土しており、共に同形のものであるが、11は、粘板岩系の堅い石材を

使用し、長さ 5.2cm、幅 2.9cm、厚さ 1.4cm、重さ 31g を計り、両端は細い線刻によって、紐掛け部を作っている。12は、砂岩を用いており、長さ 5.6cm、幅 3.6cm、厚さ 1.1cm、重さ 32g を計り、両端は打ちかきによって紐掛け部を作っている。

#### 5. 皮 刺

安山岩サスカイトの大型剝片を使用している。上部に原石面を残し、三辺に調整打を加えているが、底辺が長く刃部に作られている。長さ 9.2cm、幅 5cm、厚さ 8mm を測る。

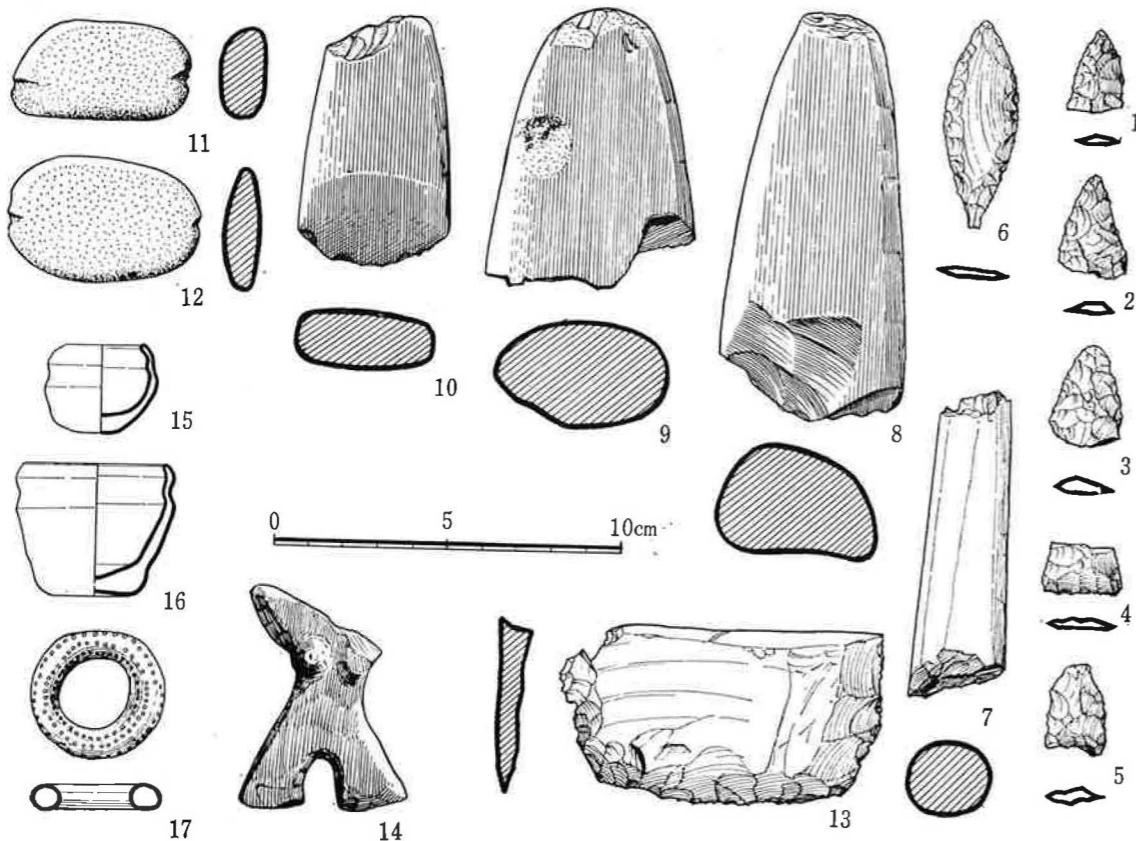
### C 土 製 品

#### 1. 土 偶

本遺跡唯一の資料で、比較的扁平な土偶である。両手両足をX状に簡単に表現しており、左手および頭部は欠損している。胸部には、女性であることを示す乳房を作っている。高さ 6.3cm、最大幅 4.9cm、腰部は 2cm を測る。

#### 2. ミニチュア土器

粗製の土器で、15は口径 2.5cm、高さ 2.5cm を測り、16は少し大きく、口径 4.3cm、高さ 4cm を測る。双方とも深鉢のミニチュアで、口縁はわずかに



第18図 石器および土製品

2段のカーブを作っている。

#### 3. 環 状 垂 飾

径 3.8cm の円形につくった土製品で、垂飾かと思われる。片面は、比較的丸い断面を持ち、円周に 1mm 大の連続刺突文を 3 列施している。裏面は、やや平たく文様を持たない (17)。

#### 4. 船 型 土 器

一端を欠いているが、長さ約 18cm、幅 10.2cm、深さ 3.2cm を計る船型に作った土器である。口縁部は、全面の器壁よりやや厚めにつくられ、他の土器と同じ様な口縁部手法をわずかながらとどめている。

(原田)

第19図 縄手遺跡出土土器編年試表

|              | 精 製 深 鉢 | 精 製 浅 鉢 | 半 精 製 深 鉢 | 半 精 製 注 口 土 器 | 粗 製 深 鉢 / 半 精 製 深 鉢 |
|--------------|---------|---------|-----------|---------------|---------------------|
| 中津式並行形式      |         |         |           |               |                     |
| 堀ノ内 I 式並行形式  |         |         |           |               |                     |
| 堀ノ内 II 式並行形式 |         |         |           |               |                     |

## V ま と め

今回の調査は、10万m<sup>2</sup>にも及ぶと考えられる遺跡の内、わずか300m<sup>2</sup>にもみたない一画での緊急調査であった。結果的には、一方では東大阪市としての文化財行政のあり方と方向が問われ、他方では複合遺跡としての縄手遺跡の複雑さに、わずかではあったが学術的メスを入れることが出来、遺跡の重要さが改めて認識された。調査は、種々の都合上、記録その他に不備な点を多く残したが、これまで、遺跡の一画で発見されていた古墳時代～縄文時代の断片的な資料によって想定していた段階が、本調査地点で多量の縄文式土器が遺構を伴って出土したにもかかわらず、不備な点を多く残した緊急発掘調査であったという背景は、実に遺憾なことである。しかしながら、今回の調査は改めて、遺跡に対する姿勢の方向付けを促し、縄文時代遺跡としての縄手遺跡の認識にとどまらず、畿内縄文文化の様相の一端を示す契機となったことは意義深いことである。問題は多く残されており、今後における調査に期待されるが、若干の問題点を整理してみる。

### 立地と環境

縄文時代集落と考えられる遺跡は、『I 遺跡の位置と環境』で記した様に、本市内では北より、日下貝塚（後期～晩期）、鬼塚遺跡（晩期）、縄手遺跡（中期～後期）、馬場川遺跡（中期～晩期）の4遺跡が、南北わずか5.5kmの間の、ほぼ扇状地形末端部あるいは、それに近い標高15～20mの地に立地している。さらに、北の四条畷市には、岡山更荒寺遺跡（後～晩期）がある。南は、羽曳野丘陵の突端に位置し、学界でも著名な国府遺跡（前期）があり、豊富な畿内縄文時代資料を提供している。八尾市・柏原市の山ろくには、現在のところ、明らかな縄文集落と考えられる遺跡は発見されていないが、今後に期待される所である。府下でも同様で、これといって目立った遺跡はないが、山間部を除き、わずか大阪湾に臨む丘陵周辺に若干の遺跡が分布し、また淀川に面し丘陵で囲まれる枚方市周辺に時期の古い遺跡（穂谷・神官寺・星田の諸遺跡）が点在するといった状態で、本格的に調査されている遺跡は少ない。

本市におけるこの様な遺跡の分布、あり方が、河内平野周辺における縄文文化の一般的傾向とすれば、もっと各地域においても遺跡数の増加・発見を見なければならないと考えられる。ただ本市を含めた周辺の当時における自然環境あるいは生活環境を考えた場合、とくに遺跡を集中せしめ、同じ様な地形に集落を成立させる条件が準備されていたのかも知れない。現在、河内平野と呼ぶ平地部には、若干の古墳～弥生時代（前期～後期）の遺跡を点在させているが、その立地は極めて低湿地に囲まれた微高地にあると考えられ、それ以前は、平野部を形成した旧大和川および山ろくからの沖積作用が進行しつつあった段階で、未だ広範囲に大阪湾からの入江が続いているものと考えられる。こうした中にあって、入江と山地にはさまれる山ろくは、自然の糧に恵まれ、集落を連立させる様な結果を導いたことも十分考えられる。本遺跡の自然遺物は、極めて遺存状態が悪く、わずかイノシシ・シカ等の獣骨が若干あると言えるのみであり、今後、小規模な貝塚状遺構が検出されることも考えられるが、日下貝塚では、多量の淡水産のセタシジミを主とし、周辺では珍しい貝塚を形成している。当時における自然環境および生活の復原は、今後、遺構・出土遺物等あら

ゆる面から詳細に検討していく必要があろう。

### 縄文式土器

本遺跡より出土した縄文式土器については、『IV 出土遺物』の中で説明したが、文様を中心として分類したものであり時期的に分類を行なったものではない。

土器片の中には、縄文時代中期に属すると思われる破片がある。それらは、第9図に示したが、土器片は、後期のものと異り、全体として、色調が灰白色系のものが多く、胎土も石英砂を多く含む粗い質のものが多い。器形・文様・手法をも考慮に入れる、中期後半期、里木II式に並行すると考えられる破片があり、縄文も粗く、太いものである。この種の土器は、本市馬場川遺跡のO地点出土資料にも極めて近く、灰白色系の土器とは別に、共に茶褐色の太い沈線文様の個性の強い土器を伴っている。

現在のところ、中期の資料は、極めて少なく、今後に期待されるところであるが、周辺の縄文時代集落を連続させる要因は、すでに中期にあったことが考えられる。

後期に属する縄文式土器片は、厳密な意味では、細分出来なかったが、磨消縄文手法によって文様を構成し、表面を研磨した精製土器、縄文・凝似縄文あるいは貝殻条痕仕上げの比較的あらい作りの粗製土器、磨消縄文を用いた沈線を主体とした文様構成の中間的な半精製土器、の三者に分類した。しかし、文様・モチーフの上では同様なものであっても、手法の細部では、時期的に分けるものと考えられる。

このうち、精製土器の第1類は、ほぼ中津式土器（後期初頭）に並行するもので、沈線は太く、縄文も比較的統一性のある施文となっている。

第2類に分類した土器は、浅鉢や皿に近い器形のものに、連続の字状縄文帶と三角縄文部によって構成される文様を施し、個性ある土器文様となっている。これらには、一部突帯が付けられ、第3類に近い文様構成・施文となっているが、横位に流れる縄手遺跡独自の文様帶として個性を持つ。

第3類は、直線的に開く深鉢が多く、文様は、上下縄文帶間に三角文・菱形文でうめ、突帯や8字状貼付文が多く見られる。この種の土器は、文様・器形・手法の上で、東日本の堀ノ内II式に極めて近い要素をもっている。しかし、口縁部の装飾は極めて少く、波状口縁に作っているものが若干あるにすぎない。さらに、第2類の土器と共に、縄文帶あるいは文様を構成する沈線は、比較的細く、弱い施文となっているのが注意される。また、縄文も統一性を欠くもので、いわゆる磨消縄文の流れに従うものではあるが、沈線を引いた後に縄文を不統一に施しているものが多いと思われる。

第4類は、沈線によって渦巻文様を付けたもので、分類では外れる12-5の浅鉢と共に、堀ノ内II式系土器あるいは第2類土器との亞種として変化したものも含まれていることも考えられる。第5類は、三角文を主体とするもので、器種は、浅鉢が多い様である。この種の土器も、堀ノ内II式系の文様構成と同じように近い。

この様に、第2類～第5類に分類した各種文様の土器は、器形あるいは細部

にわたる土器の特徴を考慮に入れると、各々の類の土器は、器種が限られ、異った時期のものも同時に含んでいるものと考えられる。

また、半精製土器の内、15—3に示した口のやや大きく開き、器外面縦位に刻目突帯を持つ深鉢（A類15—3）は、極めて、堀ノ内I式系の影響の強いものである点が注目される。

本調査では、層位的に土器のピックアップを行なったものではないが、これまでの土器をセット関係の上に立ち、2時期の形式分類を行ない、今後への捨石としたい（第19図）。

11—6に示した注口土器、文様分類の上でははずした11—9の深鉢、細かい沈線によって懸垂文的構成を持つ12—3の深鉢、あるいは、半精製としての前記広口の鉢（15—3）などは、一部を除いて、堀ノ内I式系の影響を受けた土器のセットと考えられ、これには、図示しなかったが、比較的口縁部の薄く、口縁外部にていねいに縄文のみを施した粗製の深鉢が伴っているものと思われる。

また、堀ノ内II式系の影響を受けて出来上っているセットとしては、12—5の浅鉢（口径16cm、深さ約7.6cm）、精製第2類と第3類の大半、および11—5、12—8の深鉢、12—4の浅鉢などがセット関係として上げ得るものと考えられる。この種の土器は、I式系の土器に比べ、やや量が少く、これらのセットに伴うやや口の広い深鉢あるいは、粗製の鉢などは、明確な資料として指摘出来ないが、1—12、12—4、に示した様に櫛状の平行沈線を主体とし、口縁のやや肥厚し、縄文を施したいわゆる縁帶文系の土器が占めていたことも考えられるが、この問題は、東日本文化と西日本文化の縄文文化圏ないしは交流につながる問題であり、今後の問題として指摘するにとどめたい。

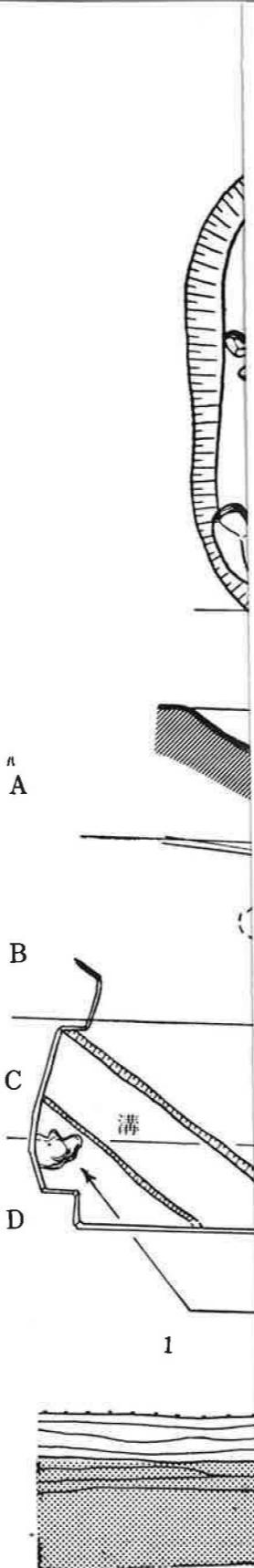
また、精製土器の第6類として示した土器片は、加曾利B I式あるいは元住吉山式並行の土器に近いと思われる。

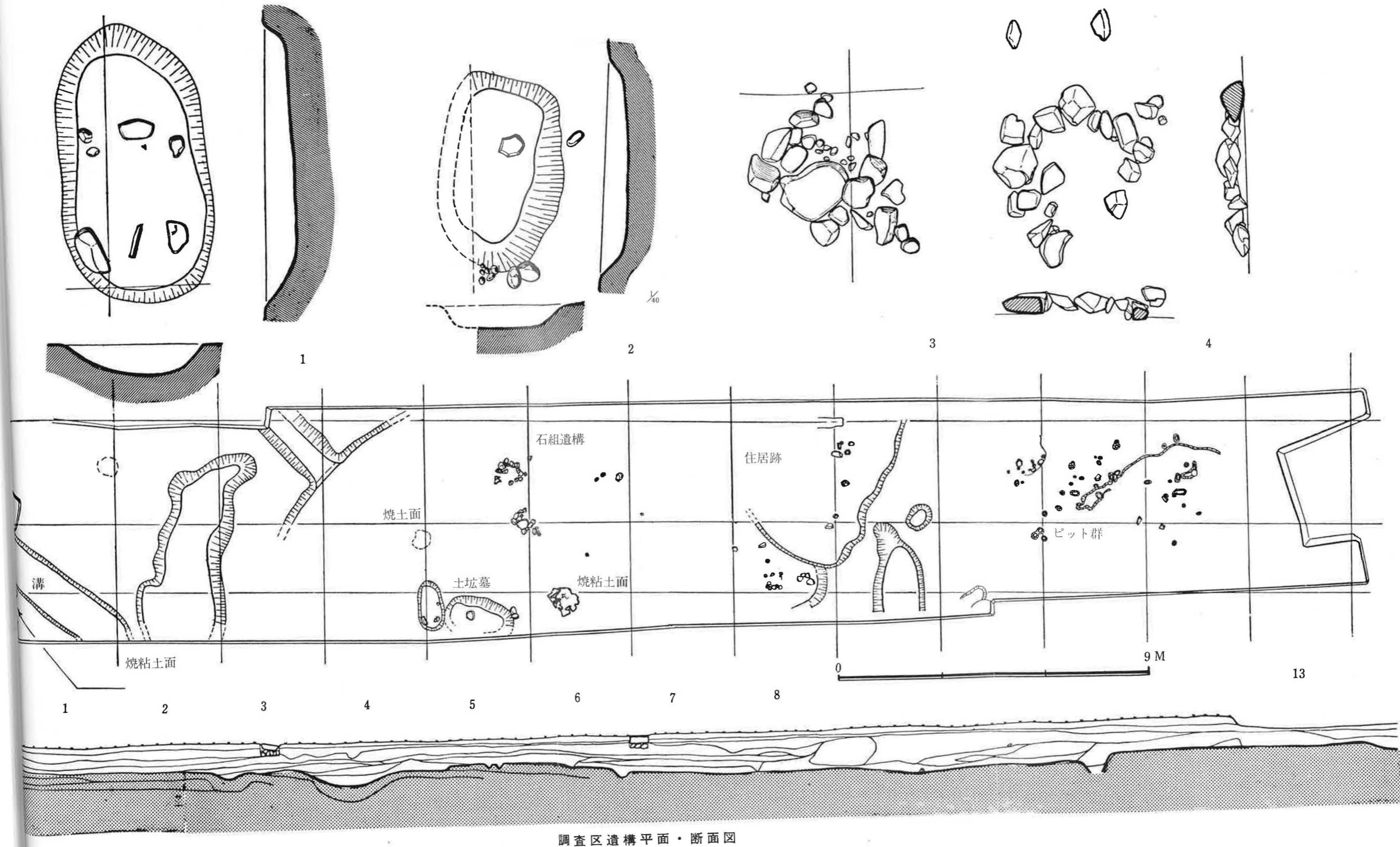
この様に、本調査において出土した後期縄文式土器の内、瀬戸内海周辺での後期初頭に位置づけられる中津式並行の土器片が若干見られ、それに続くものとして、関東堀ノ内I・II式系の土器の影響を多分に受けた土器群が見られ、先に各々に並行すると考えられる土器のセットを上げてみた。完全なものとして例示出来なかったが、それらは、縄手I・II式とも呼ぶことの出来るもので、縄文時代後期の当地周辺では、初頭に瀬戸内系の中津式並行の土器（あるいはその影響）が、比較的多く見られるにもかかわらず、次期に東日本的な堀ノ内系の土器が、はるか畿内までも強く影響を与える、主流を占め、その後、瀬戸内的なもの（彦崎K I・津雲A式）に変化していくという事実の背景には、当時の社会ないしは文化交流の上に複雑な変動を起こす要因を持っていたものと考えられる。

（原田）

縄手遺跡調査会

1971.11.





調査区遺構平面・断面図



690